２０１３年度　修士論文

ドイツブンデスリーガにおける
ユース育成に関する研究

Research on Developing of Youth Academy
in Bundesliga Clubs

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツビジネス研究領域

5012A056-5

三澤　翼

研究指導教員：　平田　竹男　教授

目次

第 1 章　序論 1
　第 1 節　背景 1
　第 2 節　先行研究 2
　第 3 節　目的 3
第 2 章　研究手法 4
　第 1 節　研究対象 4
　第 2 節　研究の手続き 4
第 3 章　研究結果 6
　第 1 節　ユース出身選手数 6
　第 2 節　YDI 9
　第 3 節　ユース出身選手の内訳 11
第 4 章　考察 12
第 5 章　結論 14
謝辞 15
参考文献 16

図 1：ブンデスリーガクラブにおけるアカデミーカテゴリー 2
図 2：過去 10 年間におけるユース出身選手数の平均値の推移 7
図 3：過去 10 年間における各クラブのユース出身選手数 8
図 4：過去 10 年におけるリーグ全体の YDI 10
図 5：各クラブにおける YDI 10
図 6：ユース出身選手の内訳 11

表 1：ユースアカデミー出身選手数 6
表 2：ドイツ・ブンデスリーガにおける YDI 9

第1章　序論

第1節　背景

近年ドイツサッカーにおける国際大会での活躍が非常に目立つようになってきている.ユーロ 2000 におけるドイツナショナルチームの惨敗以降,ドイツサッカー連盟が主導となり,若手育成を進めてきた.“DFB-Talentfoederung”（ドイツサッカー連盟 タレント促進）と名付けられたプロジェクトのもと再始動したドイツの選手育成は確実に実を結び,U-19 ヨーロッパ選手権 2008 を皮切りに U-17 ヨーロッパ選手権 2009 そして U-21 ヨーロッパ選手権 2009 とヨーロッパの育成年代のタイトルを総なめにすると言う前人未到の結果を手にするに至った.[1)] また,Union of European Football Associations チャンピオンズリーグ（以下 UEFA チャンピオンズリーグ）2012/2013 では史上初のドイツ勢決勝が行われ,ドイツブンデスリーガ 1 部所属のバイエルン・ミュンヘンとボルシア・ドルトムントが対戦しバイエルン・ミュンヘンが優勝を飾る結果となった.

ドイツサッカー協会 HP によれば,ドイツブンデスリーガに所属するクラブは junioren と呼ばれるアカデミー育成組織を持ち,育成年代のカテゴリー分けは 2 歳刻みに A から G までに分かれており,ほとんどのクラブは 1 歳刻みにチームを構成している現状である.例えば C-Junioren のカテゴリーには 15 歳と 14 歳のリーグが用意されており,A-Junioren のカテゴリーには 19 歳と 18 歳のチームが組織されている.（図 1）

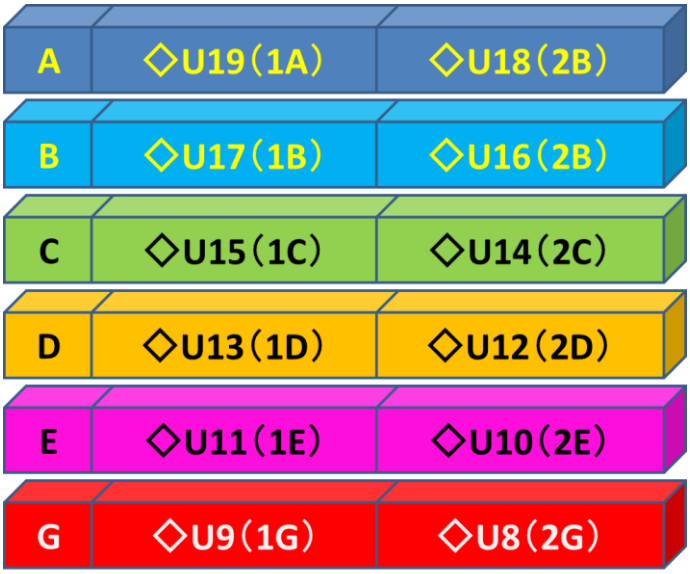

図 1：ブンデスリーガクラブにおけるアカデミーカテゴリー

また，ドイツブンデスリーガでは 2006/2007 シーズンから外国人選手枠を撤廃したと同時に「ドイツ人選手枠」を設け，育成を行なっている．ドイツ人選手枠では最低 12 人のドイツ人選手と契約することを義務付けており，さらに，ブンデスリーガ 1 部では，「8 人はクラブの地元出身でなくてはならない」また，ブンデスリーガ 2 部では，「15～21 歳の間にドイツ国内で育成（最低 3 年）された 8 人の選手と契約し，そのうち 4 人は下部組織出身でなければならない」というルールを設けており [2)]，リーグのレギュレーション自体がドイツ出身選手，そして各クラブのユースアカデミー選手の育成を促すシステムになっている．

第2節　　先行研究

このような中でプロサッカークラブのユース育成に対する注目が高まっており Stratton ら（2004）[3)] は，ユース育成はクラブだけでなく，国（代表チーム）にも関わるものであり，ユース育成を強化していくことは，直接的ではないにしろ，将来の代表チームにも利益をもたらすと述べている．近年，ユース育成に関する研究や文献が数多く見られる．ユース育成とは，選手の能力を高め，彼らの潜在能力を引き出すものである（Reilly et al.，2000）[4)] と言われている．また，ユース育成には，練習や指導方

法，スポーツ医学だけでなく，組織の効率的な運営など様々な要素が絡んでおり(Maguire et al.，2000)[5]，ユース育成はクラブの経営にも関わるものであると言える.また,兼清(2012)[6]は「J リーグにおいて,ユース育成による量と質の向上が成されている」と考察している.

以上のように，プロサッカークラブにとって，ユースチームで時間や費用をかけて育成した選手（以下，ユース出身選手）がトップチームに昇格することが，クラブの経営においても望ましいと言える.ただし，ユース出身選手がトップチームにおいて期待通りの活躍ができるとは限らない(Reval et al.，2008)[7].

したがって，アカデミーの役割を考えると，選手を育成することと同時に，トップチームで活躍できる選手を輩出することがより重要であると言える．兼清(2012）の研究では,同クラブ内でのユースとトップチームの関係における効率的な育成に関して考察しているが,他のクラブも含めた上で,どのクラブのユースアカデミーが最も多くのプロ選手を育成し,どのくらい所属チームの戦力となっているのかは明らかにされておらず,ナショナルチームや,国内リーグにおいて近年成功を収めているドイツブンデスリーガにおけるユース育成を定量的に分析した研究は多くない.

第3節　　目的

そこで本研究ではブンデスリーガ１部クラブのユースアカデミーを対象とし,ユースアカデミー出身選手が,そのトップチームもしくは,その他移籍先のクラブにおいてどのくらい活躍しているのかを明らかにすることを目的とする.

第2章　研究手法

本研究では，ブンデスリーガ 1 部クラブのユースアカデミーにおいて,ユースアカデミー出身選手が,そのトップチームもしくは,その他移籍先のクラブにおいてどのくらい活躍しているのかを明らかにするために,ドイツ・ブンデスリーガ公式サイトとドイツブンデスリーガが運営するデータサイト Weltfussball.de を参考にして出場試合数を調査した．得点数やアシスト数はポジションによって偏ってしまう可能性が考えられるので，本研究においては,選手の活躍状況を判断するための指標として出場試合数を用いた.

第1節　研究対象

研究対象期間はデータの取得が可能であった 2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンの全 10 シーズンとした.また,対象クラブは 2003/2004 シーズンにブンデスリーガ 1 部に所属していた全 18 クラブとした.以下にその対象クラブを示した.

SV Werder Bremen,FC Bayern München,Bayer 04 Leverkusen,VfB Stuttgart,VfL Bochum 1848,Borussia Dortmund,FC Schalke 04,Hamburger SV,Hansa Rostock,VfL Wolfsburg,Borussia M‘Gladbach,Hertha BSC,SC Freiburg,Hannover 96,FC Kaiserslautern,Eintracht Frankfurt,TSV München 1860,FC Köln

第2節　研究の手続き

まず初めに，ドイツ・ブンデスリーガ公式サイトと Weltfussball.de を参考にしながら 対象 10 シーズンにおける対象 18 クラブ所属の全選手（約 6000 人分）の経歴を全て調査し,データベースをエクセルにて作成した.

さらに,対象 10 シーズンにおける対象 18 クラブ所属の全選手における各クラブ毎の出場試合数ランキングを作成した.

次に，（2012・兼清）の Youth Development Index（以下 YDI）算出方法を参考に出場試合数がチーム 11 位以内の選手をレギュラークラス，同じく 12 位から 18 位以内の選手をサブメンバークラスとして,それぞれのクラスに含まれるユース出身選手の人数を算出した．出場時間が 18 位の選手までをサブメンバークラスとしたのは，スターティングメンバー（11 人）にベンチ入り可能な人数（7 人）を含めると 18 人となるためである．本研究では，ベンチ入り可能メンバーを含む 18 人の選手を各クラブにおける戦力要因と見なし，各クラブのユースアカデミーがそのクラブのトップチームやその他クラブに輩出したユース出身選手のうち，どれほどの選手が戦力要因に含まれるのかを調査した.

さらに，ドイツブンデスリーガクラブにおける①と②の合計値をユース育成指数「YDI」（2012・兼清）と定義し，戦力要因となる選手に占めるユース出身選手数を算出したうえで，ユース出身選手がトップチームのレギュラークラスなのか,サブメンバークラスなのかを分析した.

第3章　　研究結果

第1節　ユース出身選手数

本研究では，ドイツブンデスリーガ 1 部クラブのアカデミーユース出身選手をトップチームでの出場試合数ごとに分類するために，まず，各クラブのユース出身選手数を調査した．表 1 に，ドイツブンデスリーガ 1 部クラブにおける 2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンまでのユース出身選手数を示した.

表 1：ユースアカデミー出身選手数

	2003-2004	2004-2005	2005-2006	2006-2007	2007-2008	2008-2009	2009-2010	2010-2011	2011-2012	2012-2013	平均	総数
SV Werder Bremen	3	2	3	2	4	4	7	11	13	9	5.8	58
FC Bayern Munchen	13	13	12	9	11	18	22	21	19	22	16	160
Bayer 04 Leverkusen	12	9	6	7	8	7	6	10	17	17	9.9	99
VfB Stuttgart	8	7	10	6	7	6	8	9	16	13	9	90
VfL Bochum 1848	1	5	5	5	4	7	5	8	10	10	6	60
Borussia Dortmund	4	5	12	14	8	7	10	11	10	13	9.4	94
FC Schalke 04	4	4	9	13	8	13	17	17	21	18	12.4	124
Hamburger SV	0	0	1	0	2	2	7	7	13	9	4.1	41
Hansa Rostock	0	1	0	0	0	5	5	2	15	18	4.6	46
VfL Wolfsburg	0	0	1	2	3	2	0	8	10	8	3.4	34
Borussia M'Gladbach	0	2	2	0	0	2	5	7	9	10	3.7	37
Hertha BSC	0	0	0	1	3	7	8	21	13	18	7.1	71
SC Freiburg	1	0	1	1	3	4	6	10	12	14	5.2	52
Hannover 96	1	0	2	1	2	2	3	4	7	13	3.5	35
FC Kaiserslautern	1	1	1	0	3	5	4	5	9	10	3.9	39
Eintracht Frankfurt	1	1	1	1	3	6	8	8	9	11	4.9	49
TSV Munchen 1860	0	0	2	1	3	5	5	10	13	17	5.6	56
FC Koln	1	1	0	0	2	4	9	10	7	10	4.4	44
平均	2.78	2.83	3.78	3.50	4.11	5.89	7.50	9.94	12.39	13.33		
総数	50	51	68	63	74	106	135	179	223	240		

図 2 のグラフはユース出身選手数の全クラブにおける平均を表しているが，全クラブの平均を見ると，2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンにかけて，ユース出身選手数が増加していることが示された．2003/2004 シーズンはユース出身選手数の平均が 2.78 人であったが，2005/2006 シーズンには 3.78 人まで増加した．その後，2006-2007 シーズンにかけては減少したものの，その後，ユース出身選手数は増加傾向を示し，2009/2010 シーズンには 9.94 人までに増加した．2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンを比較すると，ブンデスリーガ 1 部クラブのユース出身選手数の平均は 2.78 から 13.33 へと約 4.8 倍に増加していることがわかった.

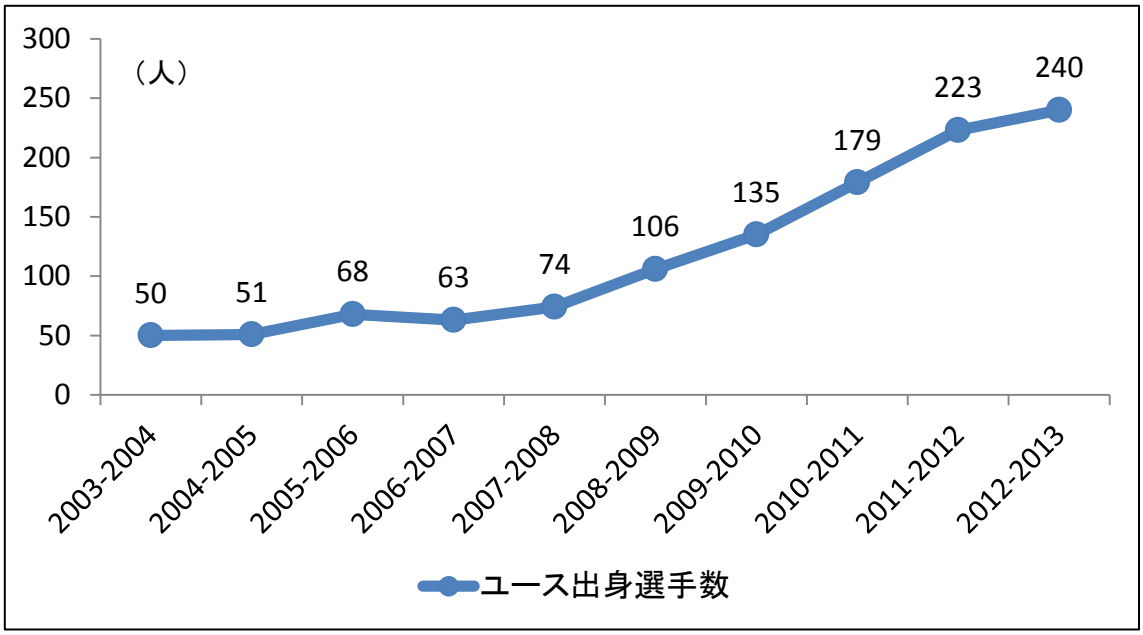

図 2：過去 10 年間におけるユース出身選手数の平均値の推移

図 3 は各クラブにおけるユース選手の輩出数を示している. 表 1 と図 3 の結果を踏まえ各クラブにおけるユース出身選手の現状について以下に示す.

ユースアカデミー出身選手を最も多くトップチームやその他クラブに輩出させていたクラブを見ると, 2003/2004 シーズンから 2004/2005 シーズンにおいては FC Bayern Munchen が最も多かった. 2005/2006 シーズンにおいてには FC Bayern Munchen と Borussia Dortmund が 12 人で最多であり, 2006/2007 シーズンにおいては Borussia Dortmund が最多となり, 2007/2008 シーズンから 2010/2011 シーズンでは FC Bayern Munchen が最多であった. その後 2011/2012 シーズンでは FC Schalke 04 が最多となり, 2012/2013 シーズンでは FC Bayern Munchen が最多という結果となった. 対象期間の 10 年間の平均ユース出身選手数を見ると, FC Bayern Munchen が 16.0 と最も高く, 次いで FC Schalke 04 が 12.4, Bayer 04 Leverkusen が 9.9 という結果であった. 直近の 2012/2013 シーズンにおいては, FC Bayern Munchen のユース出身選手数が 22 人と最も多く, 次いで, FC Schalke 04 と Hansa Rostock の 18 人であった. また, ユース出身選手数が多いクラブの 2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンの値を比較すると, FC Bayern

Munchen は 13 人から 22 人，FC Schalke 04 は 4 人から 18 人，Bayer 04 Leverkusen は 12 人から 17 人，Borussia Dortmund は 4 人から 13 人へと増加していることが分かった.

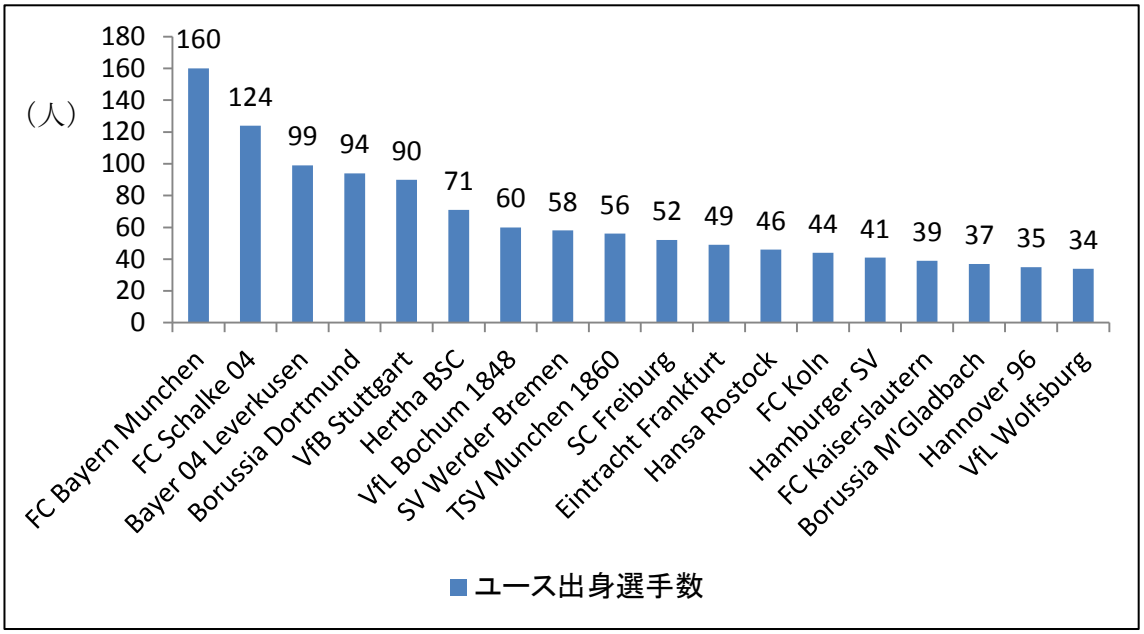

図 3：過去 10 年間における各クラブのユース出身選手数

第2節　YDI

本研究においては，出場時間がチーム内で 18 位に含まれるユース出身選手の人数を YDI とし，11 位以内の選手をレギュラークラス，12 位から 18 位までの選手をサブメンバークラスと位置づけた.

表 2 に，ドイツブンデスリーガクラブにおけるまで 2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンの YDI を示した．最も右の列には各クラブの 10 年間の平均 YDI，最も下の行には各年度におけるブンデスリーガ全体の平均 YDI を表した.

表 2：ドイツ・ブンデスリーガにおける YDI

	2003-2004	2004-2005	2005-2006	2006-2007	2007-2008	2008-2009	2009-2010	2010-2011	2011-2012	2012-2013	平均
SV Werder Bremen	2	4	3	2	3	2	4	6	4	5	3.5
FC Bayern München	8	5	10	6	9	12	14	13	16	11	10.4
Bayer 04 Leverkusen	3	3	2	3	3	5	3	3	9	5	3.9
VfB Stuttgart	3	4	4	4	6	3	4	4	6	8	4.6
VfL Bochum 1848	1	4	1	1	2	2	0	2	3	5	2.1
Borussia Dortmund	1	2	4	5	3	2	4	6	4	7	3.8
FC Schalke 04	2	4	2	5	3	8	8	7	8	9	5.6
Hamburger SV	0	0	0	0	1	0	0	1	3	3	0.8
Hansa Rostock	0	1	0	0	0	1	2	6	7	8	2.5
VfL Wolfsburg	0	0	1	1	0	0	0	1	2	2	0.7
Borussia M'Gladbach	0	0	0	0	0	1	2	1	6	3	1.3
Hertha BSC	0	0	0	1	1	2	3	6	2	7	2.2
SC Freiburg	1	0	1	1	2	3	1	4	7	6	2.6
Hannover 96	1	0	1	0	1	3	1	1	3	2	1.3
FC Kaiserslautern	1	1	1	0	0	1	1	1	3	4	1.3
Eintracht Frankfurt	1	0	1	1	1	2	3	3	4	3	1.9
TSV München 1860	0	0	1	1	1	2	2	5	4	6	2.2
FC Köln	0	1	0	0	0	1	1	4	3	5	1.5
平均	1.33	1.61	1.78	1.72	2.00	2.78	2.94	4.11	5.22	5.50	

図 4 は全クラブにおけるユース選手における YDI の平均値を表している.表 2 と図 3 の結果を踏まえ，ブンデスリーガにおける YDI の現状について以下に述べる.

全クラブの平均では，2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンにかけて，YDI が上昇していることが示された．2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンを比較すると，ブンデスリーガクラブの平均 YDI は，1.33 から 5.5 へと約 4.14 倍に増加していることが分かった.

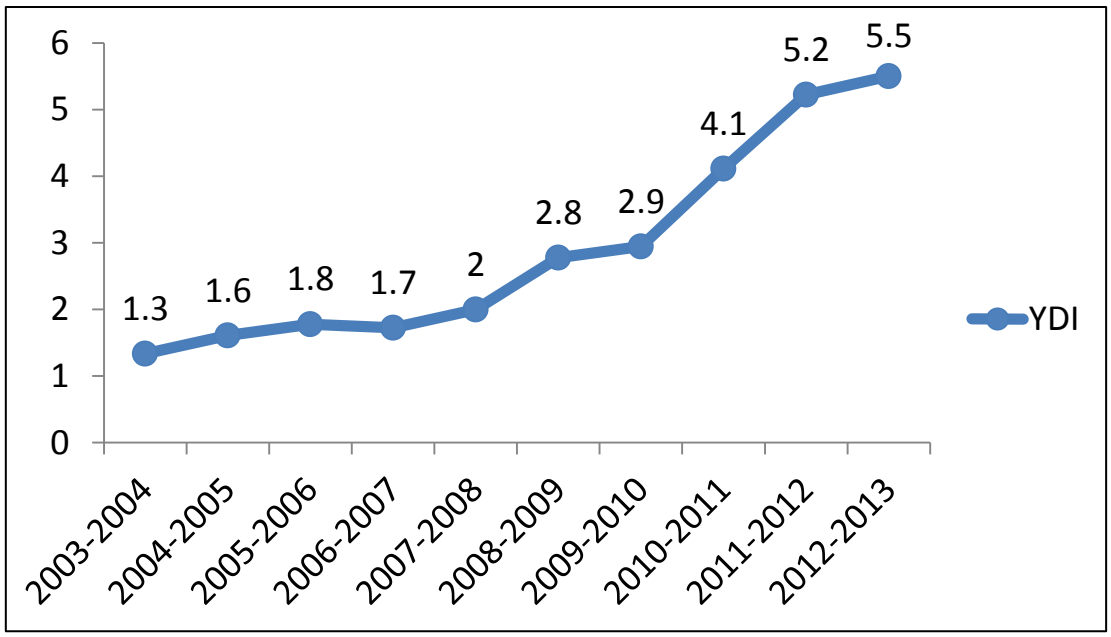

図 4：過去 10 年におけるリーグ全体の YDI

また,図 5 は各クラブにおける YDI を表しているが,FC Bayern München の平均 YDI が 10.4 と最も高く,次いで, FC Schalke 04 が 5.6, VfB Stuttgart が 4.6 であることが分かった. 一方で VfL Wolfsburg や Hamburger SV などはそれぞれ 0.7,0.8 と他のクラブと比較して低い傾向にあることが分かった.

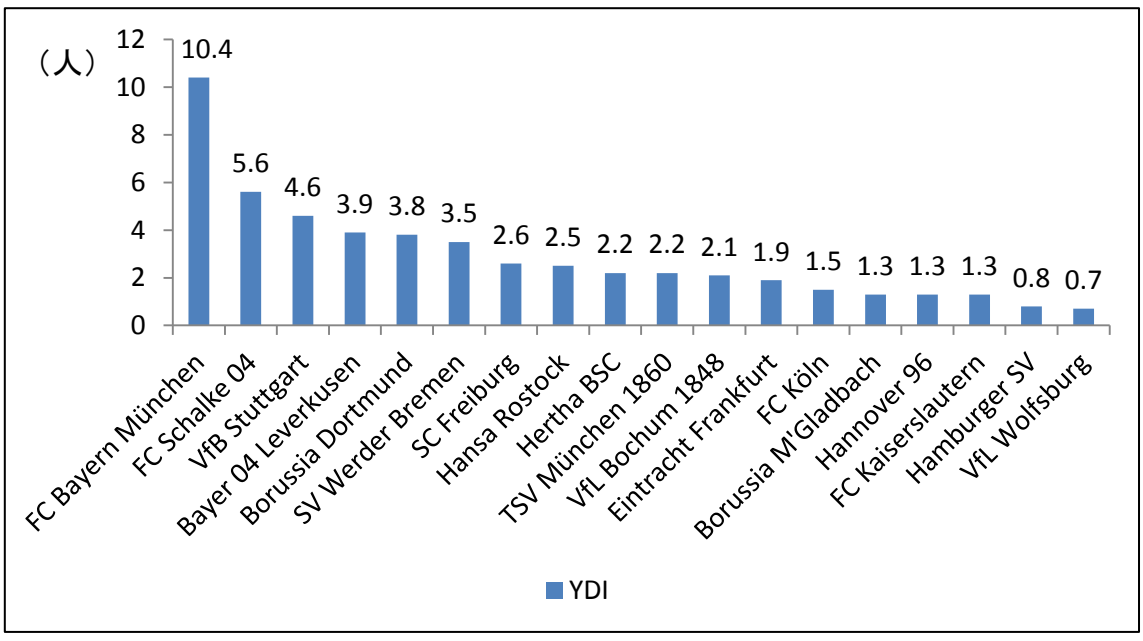

図 5：各クラブにおける YDI

第3節　ユース出身選手の内訳

図 6 に，ドイツ・ブンデスリーガ 1 部クラブにおける 2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンまでのユースアカデミー出身選手の内訳（レギュラークラス，サブメンバークラス，その他）の推移を年度ごとの平均値で示した.

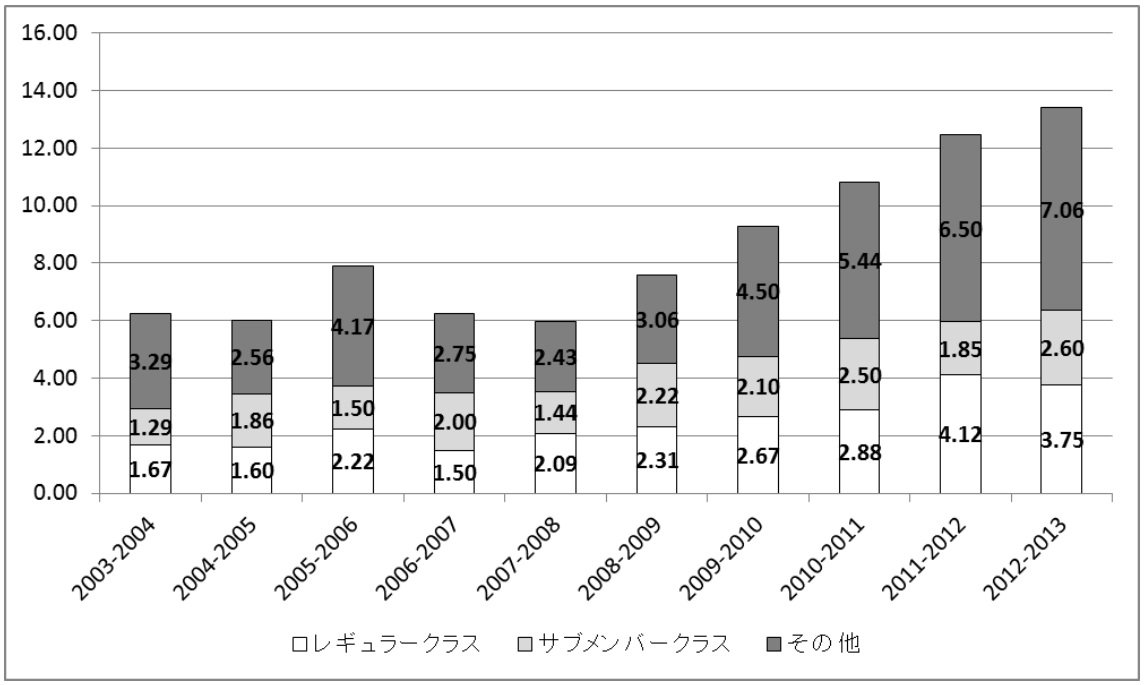

図 6：ユース出身選手の内訳

レギュラークラスとサブメンバークラス，その他のユース出身選手を足しあわせた値が，ドイツブンデスリーガ 1 部クラブのユースアカデミー出身選手数の平均値となる．2003/2004 シーズンと 2012/2013 シーズンを比較すると，レギュラークラスは 1.67 から 3.75 へ，サブメンバークラスは 1.29 から 2.6 へと，ともに約 2 倍に増加していることが示された．また，その他の選手数の推移を見てみると，2003/2004 シーズンと 2012/2013 シーズンにかけて，3.29 から 7.1 へと約 2.1 倍に増加している結果となった.

第4章　　考察

本研究により，2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンかけて，Ｊクラブのユース出身選手数が増加していることが明らかになった．また，2003/2004 シーズンと 2012/2013 シーズンにおける YDI（レギュラークラスとサブメンバークラスの合計）を比較すると，ドイツブンデスリーガ 1 部クラブ全体で約約 4.14 倍に増加していることが明らかになった．以上のことから，ドイツブンデスリーガ 1 部クラブ全体として，ユース出身選手の「数（量)」も，選手の「質」も高まっており，ユースアカデミー育成のレベルが向上していると考えられる．これらを現在のドイツブンデスリーガにおけるユース育成の実績として評価することができる．加えて、兼清（2010）の研究によると日本のＪリーグにおける YDI はリーグ全体（2010 現在）で 6.63 となっており、この数値を見てもドイツにおけるユース育成の実績が評価できると言える．

ただし，ユース出身選手数の内訳を分析したところ，その他のユース出身選手数が増加傾向にあることが示された．本研究においては，YDI に含まれるレギュラークラスとサブメンバークラスを戦力要因と見なし，分析を行った．つまり，その他のユース出身選手数の増加は，戦力要因として活躍できているとは言えないユース出身選手数の増加を示唆することとなる．また，2003/2004 シーズンから 2012/2013 シーズンのユース出身選手の内訳を比較すると，YDI（レギュラークラスやサブメンバークラス）は 1.3 人から 5.5 にまで増加し､約 4.14 倍の増加であったのに対し，その他のユース出身選手は 3.29 人から 7.05 人で約 2.14 倍に増加していた．このことから，ドイツブンデスリーガクラブにおけるユース出身選手数は増加しているものの，戦力要因としての活躍ができないユース出身選手が相対的に多いことが考えられる．これは，ドイツブンデスリーガクラブにおけるユース育成の課題と見なすことができると言える．

背景で述べたように、ドイツブンデスリーガでは 2006/2007 シーズンから外国人選手枠を撤廃したと同時に「ドイツ人選手枠」を設け，育成を行なっており、リーグのレギュレーション自体が各クラブのユースアカデミー選手の育成を促すシステムになっている。ｓのような中で、自クラブまたはその他ク

ラブへ移籍したユース出身選手の活躍度合を示すYDIが増加しているということから、自分のクラブではユースからトップチームに昇格が出来なかった選手についても、その他のクラブへの移籍を通して出場機会に恵まれ、プロ選手としてチームに貢献することができるようになった可能性が推察される．こういった仕組みづくりを構築した結果、近年見られるドイツの世界大会での勝利に繋がった1つの要因となったと考えられる。

本研究は「出場試合数」をもとにユース選手がトップチームもしくは移籍先のチームでの活躍度合を分析した.しかし、より精度を高めるためには「出場時間数」を用いる必要があるが、得られるデータに限界があるため本研究では「出場試合数」を使用するに至った。また、ドイツブンデスリーガという1ヶ国におけるトップリーグでの分析を行なったが、今後は他国リーグでの分析と比較を行うことで更なるユース育成の研究を進める必要があると言える。

第5章　　結論

ドイツブンデスリーガ 1 部において、トップチームもしくはその他移籍先のクラブにおいて活躍するユースアカデミー出身選手の増加が見られ,ユース出身選手の「数（量）」も，選手の「質」も高くなり,育成のレベルが向上している.

その中で戦力要因としての活躍ができないユース出身選手も数多く生み出している点は，ドイツブンデスリーガクラブにおけるユース育成の課題であると言える.

謝辞

本研究を執筆するにあたっては，2 年間にわたって平田竹男教授にさまざまなご指導をいただきました．厳しさの中に深い愛情のあるご指導を頂戴し，人生において最も充実した２年間を過ごさせて頂くことができました．また，本研究をまとめる機会をいただきましたことを心より感謝いたします．そして，副査を務めていただいた中村好男先生，児玉有子先生にこの場を借りてお礼を申し上げます．

共に勉学に勤しんだ平田研究室の社会人 1 年制コースの皆様，2 年制コースの先輩方である畔蒜洋平氏，佐藤佑樹氏，鈴木直樹氏，間仁田康祐氏，原展章氏，後輩の久保谷友哉氏，山本亜雅沙氏，李彤楓氏には大変お世話になりました．心より感謝の意を申し上げます．

最後に，大学院生活を全面的に応援して頂き，生活面や精神面など様々な部分において支援してくださった家族に，心から感謝を申し上げます．

参考文献

1）ドイツサッカー協会，http://www.dfb.de/index.php?id=511741　2013 年 8 月 9 日閲覧

2）平田竹男　スポーツビジネス最強の教科書　東洋経済　2012 年 10 月 9 日

3）Stratton, G., Reilly T., Williams A. M., and Richardson D ; Youth Soccer, Routeledge, 2004

4）Reilly, T., Williams, A.M., Nevill, A. and Franks, A. ; A multidisciplinary approach to talent identification in soccer. Journal of Sports Sciences, 18, 695-702, 2000.

5）Maguire, J. and Pearton, R. ; The impact of elite labour migration on the identification, selection and development of European soccer players. Journal of Sports Sciences, 18, 759-69, 2000.

6）兼清文彦,平田竹男，J リーグクラブにおけるユース出身選手に関する調査，スポーツ産業学研究,Vol.22, No.1 pp.91-96,2012

7）Relvas, H., Richardson, D., Gilbourne, D and Littlewood, M. ; Youth development structures, philosophy and working mechanisms of top-level football clubs: a pan-European perspective. Science and Football VI: The Proceedings of the Sixth World Congress on Science and Football (Eds T. Reilly and F. Korkusuz), pp 476-481, 2008.

8）Weltfussball.de ＜http://www.fussball.de/＞　2013 年 8 月 11,12,13 日閲覧